「大豆単収の向上に関するシンポジウム」において、極多収大豆、栽培技術に関する会場質疑の内容を紹介します。

【極多収大豆に関する質疑】（回答：農研機構作物研究部門）

○「そらみずき」の納豆加工適性

→ 納豆に加工した際、へその淡褐色が異物に見えてしまう可能性があるかと心配される業者もいる。

○「そらみずき」と「そらみのり」東西で栽培適地を分けた理由

→ 栽培適地を分けた主な理由は、成熟期の違い。「そらみずき」は「そらみのり」より成熟期が約2週間程度早い。

○「そらみずき」と「そらみのり」の高温耐性

→ 高温ストレスの代表的なものとして茎水分の抜けが悪くなる青立ち現象があるが、両品種とも茎水分の抜けが特に悪いということはないので問題ないとする。

【栽培技術に関する質疑】

○遅播狭畦密植の手応えや課題

→（回答：野呂氏）

ブロッコリーの後作でやっていたが、令和5年産から最初から遅播狭畦密植を試みたところ、除草剤の効きが良く、種の量は慣行栽培より若干多くなる。青森県は「おおすず」しかなく、倒伏しやすいという特性があり遅播狭畦密植をしていたが、もう少し考えを変えていくともっと収量が上がるかと考えている。遅播狭畦密植でも台形にしてやる方法なので、ドリル播き狭畦ではない。

→（回答：アグリード）

当初、慣行（60cmで中耕）と狭畦密植を半々で取り組んだ。結果、2年目に、長引く降雨の影響で中耕作業が適期に実施できなかった。収量も施肥量も同じ条件で、両者の収量を比較したところ、摘心も中耕もしなくても慣行より狭畦密植の方が収量がよかったので、コスト面も踏まえて3年目より全て狭畦密植をしている。

→（回答：農研機構）

雑草対策は先手必勝。慣行栽培は、大豆がしっかり生育することが前提。加えて、除草剤が草種に偏りがあることに気をつけること。発生する草種が分かってきたときにどういう対策をとらなければならないか。除草剤による対策が難しいとなったときには物理的対策である中耕は上手に使ってもらった方がよい。状態を見て適正に判断をしてもらいたい。

○安田氏の狭畦密植の条件、摘心実施時期とその効果

→（回答：安田氏）

2m40cmのロータリシーダで畝幅40cmで6条蒔き。種子量は、6月中旬であれば10a

あたり 6 kg、7月になるにつれて 6～8 kg/10a の間でだんだん増やしている。

摘心の時期は、標高 600m の 6 月中旬播きであれば、7～8 葉期が良いと思うが、基本的に開花期に終わらせたいのが一番。お盆が開花期なので、その 1 週間前である 7 月下旬から 8 月頭に摘心している。

摘心の技術を調べた際、側枝が増え、根本に花がつくので収量が上がるという情報があり、実際に摘心の実施有無で収量を比較したところ、そこまで差が出なかった。費用対効果を考えるとなかなか大変な作業だが、一番の課題が倒伏だったので、その解決のために摘心している。側枝は間違いなく増えるとは感じている。

○灌水の頻度

→ (回答：安田氏)

令和 5 年産は、全く雨が降らなかったもので、多いところで 4 回実施。何事もなければ灌水はしたくない。雨が降るのであれば全く実施しない年もある。開花期以降は基本的には水が必要な時期なので、天気予報でこの先雨が降らず、作物を観察したときにそろそろ水が欲しそうと思ったら、かけるようにしている。

開花期前はなるべく我慢し、開花期以降で 1～2 週間おきに実施。

ここ数年、灌水は積極的に実施している。

→ (回答：農事組合法人ふくどみ)

慣行栽培なので、できれば灌水したくないのが本音。条間が大豆の葉で覆われていればよいが、覆っていないときに水をかけると表面の草が芽吹いてくるので散々な目に遭うため気をつけている。年 2～3 回くらい実施。

播種後から生育途中にかけてずっと雨が降り、根がなかなか下に入らないときは、特に干ばつ害が起きやすいので苦労している。

ここ数年は毎年実施している。

○青立ち対策

→ (回答：アグリード)

青立ちは県道沿いや大型店舗の隣接農地に発生していて、おそらく照明の影響だと思う。大きな収量ロスになるため対策方法に苦慮しているが、現況、従来品種銘柄である「フクユタカ」を今も相変わらず栽培している。

6 年産より新品種の青立ちしにくい「そらみのり」の作付けにも挑戦し、今後も良い対策がないかを皆さんと一緒に考えていきたい。

→ (回答：國分先生)

青立ちはやっかい。色んな要因が複雑に絡んでいて、科学的にこういう条件なら出るという再現はできない。青立ちしにくい品種を選ぶのが一番効果的かと思う。基本技術をしっかり行い、莢付きを多くすると、莢に茎葉の養分がいき、枯れ上がりがきれいに仕上がるという理屈だと思うので、特効薬はない。